

歌わない木は使わない。

Body

プロ・ギタリストがしばしば口にする、同じモデル内における鳴りの当たり外れは、クラフツマンにとって恥ずべきことである。木材は、個々において性質が違ふからというのはいきなりでない。大切なのは、ボディの鳴りを生かした音創りを徹底するという意志だろう。ヤマハは、歌う木を選択する。近頃見受けられる、PUのみで音を創る手法を取るつもりはない。歌うか、歌わないか。材の選別は2段階におわる。まず、伝播速度の機械測定。ギター同様、響板を持つ管楽器の音響測定技術に応用した独自の手法である。数値という客観的な指針を導入することで、クラフツマンの才能だけに頼っていたクオリティ・コントロールは、その信頼性を飛躍的に高める。次の段階は、音楽を語るクラフツマンの目と耳だ。経験から培われた独特の勘は、マシンには真似のできない極めてアカスティックな視点から、材を選び出して行く。ここにおいて、ヤマハの求めるクオリティを持つボディ材だけが揃う。このボディに対するアプローチは、山本恭司、野呂一生、ジョン・パテロッチのモデルに導入された多層構造ボディという新たな手法にも生かされている。なぜなら、個々の材の性質を知り尽くしていなければ、多材の組み合わせで音をコントロールすることなどできないからだ。そしてなによりも、アーティストの耳は、歌わない木を決して許さない。

握り方にはパターンがある。

Neck

ネックは、握りやすければいいのではない。なぜなら、プレイヤーは、握ることが目的ではなく、弾くために握るからである。よって、ヤマハは、プレイ中の握りのフォームには様々な型が存在するという事実をもとにネックをデザインする。すなわち、ネックをひとりで異なる手の形にフィットさせるのではなく、演奏するジャンルやプレイスタイルにフィットさせるのである。ギター製作の歴史の中で、ヤマハは、理想的なくつかのネック・バリエーションをデータとして蓄積している。このデータは、ネック形状、フレット・タイプ、指板材、指板面アールの組み合わせすべてが考慮され、プレイヤーのグリップを完璧に網羅するものとなっている。コンテンツボラーなハードロック・ギターRGXシリーズを見るだけで、ヤマハの膨大なデータの中からモデルコンセプトに合わせた意識的な選択をして、ネック回りのスペックを決定していることが分かるはずだ。ワイド&シン・グリップ、350R、24フレット、そしてサテンフィニッシュなど、すべてが進化を続けるハイテクを弾きこむことをテーマに設定されている。ヤマハは、あなたの手の形は知らない。しかし、あなたの握り方は知っている。

何も塗っていないように塗る。

Finish

木の鳴りを最重視するのであれば、ギターには何も塗らないほうがいい。今までの塗装は、色味や光沢を生かそうとするあまり、ボディ材が奏でる歌声まで塗り込めてしまっていた。ヤマハは、楽器塗装の長い歴史から、ギター・フィニッシュに関してひとつの結論を導き出した。木が、気がつかないように塗る。つまり、木材に異なる層を作り出すことであるフィニッシュにおいて、塗装膜を限界まで薄く、カラーリングの質を維持しながら、材と一体化させるのである。こうすれば、ギターを美しい色で仕上げながら、美しい音で鳴らすことができる。セミオーダーシステムに、ラッカー・トップを選択可能としたのは、このようなヤマハのギター塗装哲学の具現化である。浸透性に優れたラッカーは、下にある材の呼吸を妨げないため、ボディ鳴りを最大限に生かせるとともに、経年変化により「枯れた」味を付与する。独特のクオリティは、工程やコストへの影響を補って余りある魅力だ。さらに、クラフツマンのハンドワークによる薄塗りメソッドは、耐久性と光沢において普及していたウレタン・トップを、新たにサウンド・クオリティというステイタスのもと、存在させることができた。シースルー、サンバースト、ソリッド。カラーリングの美しさで選択すれば、あなたは同時に優れた音響性能をも手に入れることになる。

パーツもすべて楽器である。

Hardware

過去のギタリストたちは、ギター・パーツに無関心すぎた。ハードウェアを機能だけで選択していた。ギターは、エンドピンからペグまでが、鳴り、響きあい、サウンドを創っている。ヤマハは、ハードウェアを、ギターの機能性のみを語る一部品ではなく、楽器そのものと捉える。そして、ボディ材を規準にそれぞれのレゾナンスを設定する。これにより、ギター全体の鳴りは統一感を持ち、ナチュラルなトーンを得ることができる。例えば、DiMarzioピックアップや、フロイドローズ・ライセンスのオリジナル・ロック式トレモロ・ユニットRockin'Magic-Pro IIIなど、すでに十分な評価を得ているパーツを搭載しても、レゾナンスの統一という概念が欠如していたら、ギター製作者やプレイヤーの意図から外れたアンバランスなサウンドを生み出すギターになってしまう。そのためすべてのパーツは、搭載機種のプロダクト・コンセプトとのパーフェクトな融合のために、さらなる進化を求め、リファイン/チューニングを施してから組み上げることがセオリーとしている。この、パーツ単体の完成度だけではなく、それぞれのマッチングを計算しながら全体を構築するヤマハ・メソッドは、ギターの完成度に対する限りない追求に他ならない。

世界最高水準のエレクトリックギターをプロデュースするというポリシー。

YGD PHILOSOPHY

YAMAHA GUITAR DEVELOPMENT